尾 坂 遺 跡

社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）
長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群　　馬　　県
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

尾坂遺跡
社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財調査報告書
二〇一二
群馬県
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

尾 坂 遺 跡

社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）
長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群　　馬　　県
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、群馬県吾妻郡長野原町に所在し、社会資本整備総合交付金事業に伴い発掘調査が行われ、天明３年(1783年)の浅間山噴火によって発生した泥流で埋もれた畑跡が確認された尾坂遺跡の調査報告書です。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団では八ッ場ダム建設に伴い、吾妻郡内で数多くの埋蔵文化財発掘調査を実施してきました。尾坂遺跡もダム建設に伴う代替地建設やＪＲ吾妻線の路線変更に伴う広大な面積の発掘調査を実施中ですが、平成23年にこの遺跡の西隅で長野原草津口駅舎整備に伴う発掘調査を行いました。長野原草津口駅は草津温泉などの名湯が集まり群馬の奥座敷と呼ばれる観光地の玄関口ですが、新しい駅舎となってより多くの人々に親しまれることが期待されています。

平成24年４月、当事業団は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団となりましたが、引き続き尾坂遺跡の整理作業を実施し、このたび報告書刊行となりました。この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の歴史資料として学校教育・社会教育に役立てていただくことを望んでやみません。

発掘調査から本書刊行に至るまで、群馬県県土整備部および中之条土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆さまから多大なご協力を賜りました。ここに心より感謝の意を表し、序といたします。

平成24年９月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　須　田　榮　一

例　言

1　本書は、平成23年度社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴い発掘調査された尾坂遺跡の調査報告書である。

2　尾坂遺跡は群馬県吾妻郡長野原町長野原字尾坂に所在する広範囲の遺跡であり、八ッ場ダム建設に伴う発掘調査が平成６年以来断続的に行われている。今回報告の地点は尾坂遺跡の西隅にあたる字尾坂1263-2にあり、他の地点に先行して調査報告書を刊行することとなった。

3　事業主体　群馬県県土整備部

4　調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
(平成24年４月より公益財団法人に組織改定)

5　調査期間　平成23年(2011年) 12月１日～平成23年(2011年) 12月31日

6　整理期間　平成24年(2012年)７月１日～平成24年(2012年)７月31日

7　発掘調査体制は次のとおりである。
発掘調査担当　関根慎二(上席専門員)
遺跡掘削委託：有限会社高澤考古学研究所
地上測量委託：株式会社測研

8　整理事業体制および本書作成の担当者は次の通りである。
整理担当・編集　新倉明彦(上席専門員)
執筆本文　中沢　悟(第１章－１)
飯田陽一(第２章－１・第４章)
関根慎二(その他)
遺物観察　大西雅広
遺物写真撮影　佐藤元彦

9　発掘調査および報告書作成には、東日本旅客会社長野原草津口駅、国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会をはじめとする関係機関からご指導を頂いた。

10　発掘調査資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　　例

1　本報告書における座標値は2002年４月改正以前の日本測地系による。これは、八ッ場ダム建設に伴う発掘調査地点を網羅してきた測量システムを共有する便を考慮したことによる。

2　挿図中に示す方位記号は国家座標上の北を示している。なお、真北方向角は0°　42′　14″である。

3　遺構番号・トレンチ番号については、発掘調査時の名称を踏襲した。

4　遺構図の縮率は下記のとおりで、図にスケールを加えた。
　畑全体図(平面)１：200
　畑部分図(平面)１：80　　同(断面)１：40

5　図示に耐える遺物の出土がなかったため､遺物実測図は掲載していない。出土遺物は全点撮影して一括で掲載した。その縮率は約１／２である。また遺物の観察のみ本文13頁に記した。

6　本文および一覧表の方位表記について、例としてN－45°Ｅとあるのは座標北より45度東側に振れていることを示している。

7　グリッドの表記方法については本文２頁に記した。

8　引用した文献は、本文15頁に一括して記した。

9　本文中にある火山噴出物については以下のような表記による。
　浅間山Ａ軽石　1783年(天明３年)　　→　As-A
　浅間山板鼻黄色軽石(約15,000年前)　　→　As-YP

10　第13図は、長野原町長の承認を経て、同町発行の2500分の１の測量図を使用し、調整したものである。

目　次

序
例　言・凡　例
目　次

第１章　調査に至る経過と遺跡の概要
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の方法 …… 2
第３節　調査経過 …… 2

第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　周辺の遺跡 …… 3
第３節　遺跡の基本層序と畑の計測 …… 6

第３章　発見された遺構と遺物
第１節　天明泥流下の遺構 …… 7
１号畑 …… 8
２号畑 …… 8
３号畑 …… 9
４号畑 …… 10
５号畑 …… 11
第２節　天明泥流下畑以前の調査 …… 12
第３節　古代以降の出土遺物 …… 13

第４章　まとめ …… 14

参考文献 …… 15
写真図版
抄　　録
奥　　付

挿　図　目　次

第１図　尾坂遺跡の位置…… 1
第２図　区・グリッド設定模式図…… 2
第３図　周辺の遺跡分布図 …… 4
第４図　基本土層図…… 6
第５図　畑畝計測概念図…… 6
第６図　尾坂遺跡全体図…… 7
第７図　１号畑平面及び断面 …… 8
第８図　２号畑平面…… 8
第９図　３号畑平面…… 9
第10図　４号畑平面及び断面 …… 10
第11図　５号畑平面…… 11
第12図　トレンチ調査配置図と土層断面 …… 12
第13図　尾坂遺跡の範囲と今回の調査地点…… 15

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧…… 5
第２表　畑出土遺物一覧…… 13

写真図版目次

PL．1
1　北側から眺めた遺跡周辺

PL．2
1　遺跡全景(東から)
2　遺跡全景(西から)

PL．3
1　畑全景(南東から)
2　1号畑(北西から)
3　１号・２号畑境付近(西から)
4　１号畑断面(西から)
5　２号畑断面(東から)
6　３号畑・４号畑境(南から)

PL．4
1　３号畑断面(東から)
2　４号畑(西から)
3　４号畑断面(東から)
4　５号畑(西から)
5　４号・５号畑(東から)
6　５号畑断面(東から)
7　軽石除去後の５号畑畝・畝間(東から)

PL．5
1　下面の調査状況(西から)
2　２号トレンチ(西から)
3　４号トレンチ(西から)
4　出土遺物

第１章　調査に至る経過と遺跡の概要

第１節　調査に至る経過

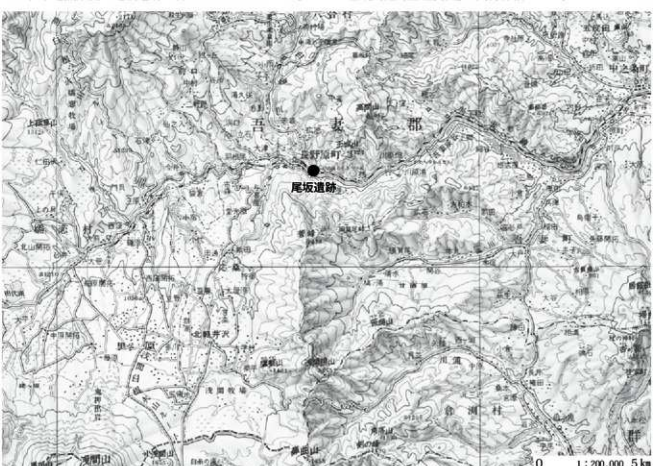
長野原草津口駅は、ＪＲ吾妻線の特急列車停車駅で草津温泉をはじめとする観光地の玄関口として利用者の多い駅である。この駅舎整備はハッ場ダム建設の関連事業及び社会資本整備事業として平成21年度に計画された。

本工事に伴う埋蔵文化財調査は、群馬県教育委員会文化財保護課が群馬県県土整備部特定ダム対策課からの調査依頼をうけ、平成23年８月２日に試掘調査を実施した。この結果、江戸時代天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流土下から畑跡が確認され、調査が必要となった。この地点は埋蔵文化財包蔵地登録がされていなかったため、平成23年10月14日に長野原町教育委員会から文化財保護法95条に基づき埋蔵文化財包蔵地の変更が報告され、本地点東側の尾坂遺跡に含まれることとなった。

この地点の発掘調査は群馬県教育委員会文化財保護課の調整により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなった。平成23年11月18日、群馬県知事と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で、「平成23年度社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託」を契約締結した。

発掘調査は、平成23年12月１日より開始し、遺跡内での作業を12月19日に終了し、月内に記録類の基本整理作業を行った。

調査報告書作成のための整理作業は、平成24年７月１日、群馬県知事と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間の「平成24年度社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財整理委託」の契約締結による。



第１図　尾坂遺跡の位置（国土地理院 1/200,000 地勢図「長野」平成 10 年２月１日を使用）

第２節　調査の方法

平成６年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査では、遺跡名称の略号やグリッド設定方法などは群馬県教育委員会文化財保護課・長野原町教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の３者で作成した「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」（文献１に詳細が記載されている）に基づき調査が進められてきた。本遺跡についても群馬県県土整備部による事業であるが、八ッ場ダム関連の諸遺跡に隣接しており、これまでの方法に準拠して調査を行った。尾坂遺跡（遺跡番号YD－02）は平成６年以降断続的に調査が行われているが、本調査地点もこの中に取り込まれた。

グリッド設定方法は国家座標（旧日本測地系）に基づく日本平面直角座標系第Ⅸ系を使用し、吾妻郡東吾妻町大柏木付近を基点（座標値Ｘ＝+58000.0、Ｙ＝-97000.0）として調査区全体を覆う方法がとられている。この基点より１km方眼の大グリッドを「地区」、100m方眼の中グリッドを「区」と称した。この区の中を４ｍ方眼でさらに区切り、東から西へアルファベットのＡからＹ、南から北へ算用数字の１～25を組み合わせて呼称した（第２図参照）。今回の調査地点は29地区98･99区にあたる。

遺構確認面までの掘削には、バックフォーによる表土掘削を行い、作業員の手による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。

調査現場での遺構測図は、委託測量業者によって掘削作業と並行してデジタル測量を行った。遺構写真撮影は現場発掘担当者が行い、撮影にはデジタルカメラを主とし、撮影対象に応じて６×７版白黒フィルムを用いた。

第３節　調査経過

発掘調査は、平成23年11月中旬から調査準備を開始した。11月末には群馬県県土整備部が調査区を覆うアスファルトを除去し、その後ただちに安全柵設置・事務所設営などの事前準備を行った。12月１日から本格的な調査を開始し、表土掘削から着手した。２日には表土掘削が終了した部分から遺構確認作業を行い、５日には調査区全体に広がる畑の全景写真撮影を行った。６日は測量業者による遺構地上測量を行いながら、畑の断面観察のためのトレンチ調査を行った。７日は畑を覆う軽石を一部除去し、軽石の堆積状況を観察記録した。12日まで天明泥流に覆われた畑のさらに下にある遺構確認のため、４か所のトレンチを設定して深掘り調査を行ったが遺構の検出がなく、遺物も畑耕作土内にわずかに含まれた陶磁器等の微細片以外に見られないことから、下面調査は不要と判断し、発掘調査を終了した。

12月13日以降、グリッド調査の記録をとりながら18日までに調査区を埋め戻し、事務所、安全柵撤去などの作業を行った。19日には群馬県県土整備部に用地引き渡しを行い、遺跡内での全ての調査業務を終了した。

なお、調査区は長野原草津口駅バスターミナルの一部であった場所のため、掘削表土を置くことは出来なかった。そこで国土交通省の協力により発掘調査の終了していた同じ尾坂遺跡にある東中学校跡地に掘削表土を仮置し、調査終了後埋め戻した。

第２図　区・グリッド設定模式図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

尾坂遺跡の立地する吾妻郡長野原町は、関東地方北西部、群馬県吾妻郡域の南西部に広がる人口約5,900人の町で、沿革は明治22年町村制施行時まで遡る。

町の南部は浅間山(2,568m)東麓で長野県に接する高原地帯となる。町の北部は東流する吾妻川流域地帯で、西側は嬬恋村、北側は草津町および六合村、東側・南側は東吾妻町と接している。

吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1,362m)付近に源を発して東に流れ、渋川市で利根川に合流する長さ76.2kmの一級河川である。町域のほぼ中央で川幅を広くし、町東端では、第３紀層を深く刻んで関東の耶馬溪とも呼ばれる名勝吾妻渓谷を形成している。この吾妻川には両側に迫る山地から流れ下る多くの支流が見られるが、草津温泉から流れる酸性の強い水が湯川・白砂川を経て遺跡付近で吾妻川に合流し、かつては魚の住まない死の川であった。

吾妻川の左岸を一般国道145号線が走る。この国道は東京方面からは国道17号から沼田市で分岐し中之条町を経て、吾妻川に沿って長野原町に入り大津で草津方面の国道292号に、羽根尾で嬬恋方面の国道144号線と長野県軽井沢方面の国道146号線に分岐して終わる。古くは真田道と呼ばれた中世の要路であり、現在は日本ロマンチック街道の南側通路として知られている。

鉄道はＪＲ上越線渋川駅から分岐したＪＲ吾妻線が長野原町北部をほぼ東西に貫き、町西側に隣接する嬬恋村大前駅まで通っている。本報告の尾坂遺跡は、この吾妻線長野原草津口駅舎整備のために調査を実施したものである。

尾坂遺跡の南側には吾妻川を隔てて須賀尾峠や付近のランドマーク丸岩(1,124m)が並び、本遺跡の背後にあたる北東側には王城山(1,123m)が丸岩と対峙している。北西方向には草津白根山、南西には浅間山の活火山が時おり噴煙を見せているが、調査地点から両方の山を望むことはできない。

尾坂遺跡は吾妻川左岸の中位段丘面を中心に一部下位段丘面を含む広大な範囲にあり、これまで八ッ場ダム関連の発掘調査が行われてきた。本遺跡北側に隣接する上位段丘面には長野原一本松遺跡が立地している。西側には中之条町入山を源とする白砂川が南流して吾妻川に合流し段丘面の西限となっている。ここに架かる新須川橋に須川(酢の川:強酸の川)と呼ばれた旧名を留めている。

調査地点付近では東南方向に低くやや傾斜する平坦な地形にある。標高は593mを測る。

第２節　周辺の遺跡

八ッ場ダム建設に関連する調査が始まる以前、尾坂遺跡のある長野原町域で行われた埋蔵文化財発掘調査は、川原畑地区に所在する石畑岩陰遺跡などに限られ、多くなかった。一方、天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う土石流で埋もれた嬬恋村鎌原遺跡は1980年の調査開始以来全国的に注目されていた。

昭和62年、八ッ場ダム建設に関する埋蔵文化財詳細分布調査が県および町教育委員会によって行われ、183カ所の遺跡(包蔵地)が報告されて以降、同ダム建設に伴う多数の発掘調査が行われ、平行して長野原町教育委員会によっても多数の調査が行われるようになった。

平成６年から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による八ッ場ダム建設に伴う発掘調査が開始され、縄文時代から近世にかけての調査が行われ現在に至っている。特に縄文時代の遺跡は豊富で、長野原一本松遺跡や横壁中村遺跡などの拠点的集落やその周辺に展開する中・小規模な集落など多数の遺跡が調査されてきた。反面、平野部で農耕集落が展開する弥生時代後期から奈良時代にかけての遺跡は少なく、平安時代に至ってふたたび集落が増加する。

以下、ここでは本書で報告する天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流(以下、天明泥流と略す)下の遺跡を中心に、尾坂遺跡周辺の主な遺跡を概観する。

天明泥流下の遺跡は吾妻川両岸の中位・下位段丘面において多数調査されてきた。長野原地区では本遺跡に先立って調査した尾坂遺跡（２）で広大な畑と屋敷の一部が調査されている。畑の中には収穫前のアサがなぎ倒された状態で確認できる地点もあった。

吾妻川の下流側から天明泥流下の遺跡を辿ると、左岸の川原畑地区の東宮遺跡（４）・西宮遺跡（５）から畑とともに残存状態の良い集落が調査されている。特に調査のすすんだ東宮遺跡からはカイコの繭・アサの実などの収穫物が集落内から検出されているほか、鍬・横槌・杵・唐臼などの農具・加工具など当時の生活を復元する膨大な量の遺物を出土している。

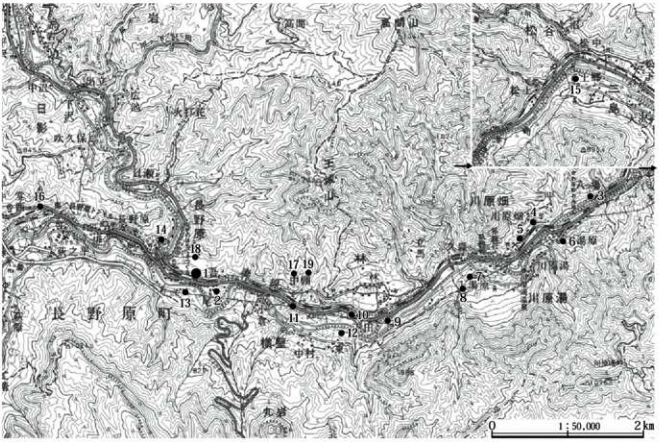
川原畑地区の吾妻川対岸にあたる川原湯地区では石川原遺跡（７）の一部で調査が行われているが、天明泥流下の畑・家屋・道跡などが確認されている。川原湯勝沼遺跡（８）でも調査地点の全域に畑が広がっていた。

林地区は長野原地区・川原畑地区の間に位置するが、ここでも吾妻川下位・中位の段丘上では泥流下の畑が広く確認されている。下原遺跡(10)・中棚Ⅱ遺跡(11)で調査され、下田遺跡（９）でも畑の存在することが試掘で確認されている。中でも下原遺跡からは長野原地区では調査例の少ない水田と思われる遺構が確認されている。

長野原地区では中棚Ⅱ遺跡で畑畝上で見られた栽培物の痕跡と思われる空洞に石膏を流し込み、サトイモが栽培されていたことを確認している。嶋木Ⅰ遺跡(14)は白砂川右岸でも畑が確認され、逆流した泥流が堆積していることを明らかにした。長野原地区対岸にある横壁中村遺跡(12)はこの地区を代表する縄文時代の遺跡だが、天明泥流下の畑も確認されている。

これまでの調査で、泥流を被った平坦面や緩やかな斜面のほとんどの場所で畑の跡が確認され、山間の狭い地域で徹底的に畑を広げていることが分かってきた。

このほか吾妻渓谷を出口付近に広がる東吾妻町上郷岡原遺跡(15)でも広大な麻畑が調査されている。ここでは泥流になぎ倒されたアサの他、アサ収穫作業中であったと思われる地点も調査されている。近年まで使われてきた麻屋と呼ばれるアサ収納建物壁材も確認されている。他にこの地域では稀少な水田が検出された。第３図掲載範囲から東側へ外れるが、細谷Ｂ遺跡など天明泥流下の畑が調査されている。



第３図　周辺の遺跡分布図（国土地理院1/50,000地形図「草津」平成11年１月１日発行を使用）

第１表　周辺遺跡一覧

（天明泥流下の主な遺跡）

	遺跡名・所在地	畑・作物	建物	その他	備考	文献
1	尾坂(駅舎部) 長野原町長野原	狭畝幅畑５枚。			本遺跡	
2	尾坂 長野原町長野原	広大な畑地。軽石を畝間に埋める復旧途中の畑など多様。泥流でなぎ倒されたアサと思われる作物。	母家建物の一部、および掘立柱建物１棟。	道・溝など。他に縄文時代・平安時代集落。	未報告	1、14、15、16、17、18、19
3	石畑 長野原町川原畑	狭畝幅畑２枚。 植物珪酸体(少量)：イネ・ムギ類・ヒエ属。			小範囲の確認。	1
4	東宮 長野原町川原畑	畑と泥流でなぎ倒されたアサと思われる作物。 屋敷畑。	母家建物６棟・蔵１棟　他	集落よりアサの実・梅干し等農産物。酒造・油絞り・養蚕道具など。		1、12、13
5	西宮 長野原町川原畑	畑５枚以上。一部に暗渠施設を持つ。	母家建物１棟・小屋１棟	石垣。泥流被災後の天地返し痕跡。	未報告	17
6	西ノ上 長野原町川原湯	畑12枚。このうち狭畝幅畑７枚、90cm前後２枚、110cm前後１枚　他。泥流でなぎ倒された作物。		畝幅の狭い畑より円形平坦面。		3
7	石川原 長野原町川原湯	畑６枚。このうち狭畝幅畑５枚。	母家建物１棟	縄文時代集落・列石。	未報告	17
8	川原湯勝沼 長野原町川原湯	道や石垣で区切られた畑10区画以上、畑56枚以上。狭畝幅畑が過半。泥流でなぎ倒された作物。 植物珪酸体(少量)：ヒエ属。		畝幅の狭い畑より円形平坦面。道・溝・石垣など。他に古墳・平安の住居など。		1、4
9	下田 長野原町林	狭畝幅畑２枚。	母家１棟 (上間部分)		試掘調査	1
10	下原 長野原町林	道や石垣で区切られた畑20区画。 種実：イネ・オオムギ・コムギ・ササゲ　他。	麻屋と思われる施設痕跡。	泥流下の畑内円形平坦面・水田・道・石垣。他に古墳・平安の住居など。		2、6
11	中耀Ⅱ 長野原町林	道や石垣で区切られた畑30区画。狭畝幅畑が集中してみられる。畝幅80cm前後の畑よりサトイモ。 植物珪酸体：イネ属・ヒエ属・オオムギ族。		泥流下の畑内円形平坦面・道・石垣。		2、3
12	横壁中村 長野原町横壁	狭畝幅畑２枚。				2
13	久々戸 長野原町長野原	道や石垣で区切られた畑25区画以上。 植物珪酸体(少量)：イネ・ヒエ属	掘立柱建物。	泥流下の畑内円形平坦面・道・石垣。	町教委調査分を含む	2、3、24
14	嶋本Ⅰ遺跡 長野原町長野原	狭畝幅２枚。畝上に約10cm間隔の株痕跡。		円形平坦面。		22
15	上郷岡原 東吾妻町上郷	広大な畑地。泥流でなぎ倒されたアサ。	母家建物。麻屋の壁。	泥流下の畑内円形平坦面・道・溝・石垣・水田。他に縄文時代・平安時代集落。		4、9、11
－	細谷Ｂ 東吾妻町三島	畑６区画。		道。平安時代集落。	上郷岡原遺跡の約1.7km下流	10
16	小林家屋敷 長野原町長野原		分限者屋敷の建物２棟の一部。			23

本遺跡と同じ畝幅50cm前後より狭い畑を狭畝幅畑と仮称した。　　時期を記していないものはすべて泥流下の施設である。

（その他の主な遺跡）

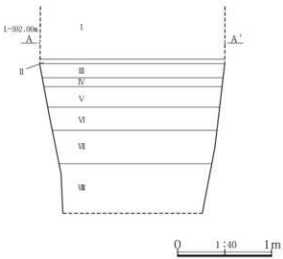
	遺跡名	遺跡の概略	備考
12	横壁中村	吾妻川右岸の縄文時代中期から後期の拠点的集落。列石・配石遺構なども豊富。他に平安時代集落・中世掘立柱建物など。	『横壁中村遺跡』（２）～(12)※
17	榆木Ⅱ 長野原町林	中近世の建物群。他に縄文時代・平安時代集落など。	文献：８
18	長野原一本松 長野原町長野原	吾妻川左岸の上位段丘上の縄文時代中期から後期拠点的集落。他に平安時代集落・中世掘立柱建物など。	『長野原一本松遺跡』（２）～（５）※
19	二反沢 長野原町林	天明三年以降の畑。	文献：５

※いずれも財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書

第３節　遺跡の基本層序と畑の計測

基本層序

尾坂遺跡は、吾妻川により形成された段丘上の平坦面に立地している。そのため、調査区内は比較的平坦であり、調査区内の土層堆積状況は、若干の傾斜は見られるが、均質なものとなっている。ここでは、１号トレンチ（第 12 図）の断面（第４図）に泥流下の基本的な層序を説明する。



第４図　基本土層図

第Ⅰ層　暗褐色土　天明３年の浅間山噴火に伴う泥流層。人頭大から拳大の礫が混入する。

第Ⅱ層　灰白色テフラ　天明３年の浅間山噴火に伴う噴出物。As-A 一次堆積物。軽石主体であるが下層に灰を確認できる。層厚最大３cm程度が畝間内で確認でき、畝上にもごくわずかに観察できる部分がある。

第Ⅲ層　黒褐色土　泥流堆積前の表土、畑の耕作土だが弱粘性でしまりやや強い。

第Ⅳ層　暗褐色土　As-YP と思われる黄白色軽石を少量混入する。Ⅲ層土より粘性が強い。斑鉄が見られる地点もある。

第Ⅴ層　黒褐色土　As-YP と思われる粗粒の黄白色軽石を多量に混入する。上面段丘からの崩落土を多量に含む層。

第Ⅵ層　暗褐色土　Ⅴ層とⅦ層の漸移層。

第Ⅶ層　黄褐色土　ローム質の粘性土。混入物少ない。

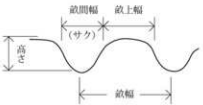
第Ⅷ層　黄褐色土　川原石を多量に含むローム質土。下層ほど礫の量が増す。川原石は不均等に堆積し、水流の影響を強く受けている。

畑の計測

本遺跡で調査した遺構は畑のみであるが、調査した畑面は凹凸があり、畝・畝間も細かな屈曲が多い。畑の記載については第５図のような計測基準を用いた数値を使用したが、これには畝幅等各計測内容について２カ所以上の計測を行って記し、凹凸や屈曲が大きなものは攪乱の影響が考えられる地点を除いた最大値から最小値を記した。

方位については、畑内の中央付近にある屈曲の少ない畝間で計測した。

面積は畝間の両端が確認できる２～４号畑について推定できる面積を記した。これは、調査範囲外で途切れる畝間についても、確認できた他の畝間と同じ長さがあると想定して長方形を復元して面積を算出したものだが、畑の全体を推定したものではない。



第５図　畑畝計測概念図

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　天明泥流下の遺構

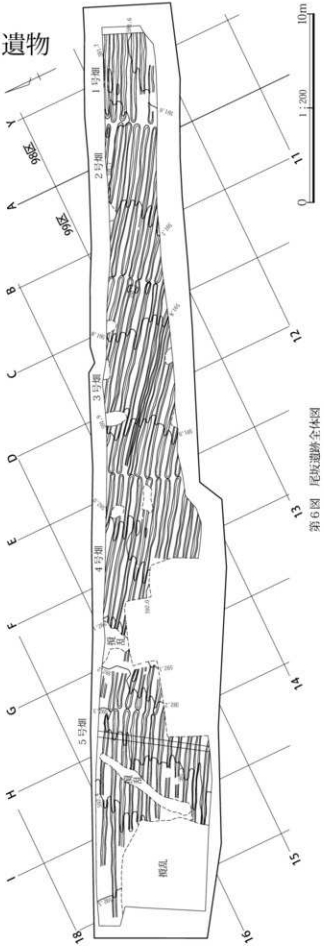
天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の直下からは、調査範囲のほぼ全面から浅間山噴出軽石As-Aで直接被覆された畑跡が確認された。畑は畝間を僅かにずらして作られた畑境が４条確認できたことから５枚の畑に分けた。この畑境に隙間が見られる部分はごくわずかで、農作業の通路用歩幅が確保されていないことはもちろん、ほとんどの部分で畝間が重複している。このように近接した畑に同一作物を栽培すれば、畑境は識別できなくなるであろう。

調査された畑面は西側で標高592.54m、東側は標高591.55mで東側へ約１ｍ低く、全体の傾斜は21/1000となる。現状での泥流層厚は西側で0.8m、東側で1.4mであった。

畑には東から西へ順に１号畑～５号畑と番号を付けた。各畑の畝間には北隅を①とし、以下②・③…と番号を付けた。各畑とも畝・畝間の規模・形状が近似しているが、As-Aの検出状態は畝上部分でもわずかに確認できる１・２号畑と、畝上部分ではほとんど確認できない３～５号畑に分かれる。畝の方向は２～４号の中央にある３枚の畑で直線的に続いているが、両傍の１・５号畑は10°傾くなどわずかな差異は観察できる。

畝間の東西両端を確認できる畑について畑の残存部分面積を記した。これは調査範囲で確認した南北両端の畝間が他の畝間と平行に延びていることを前提に、現在確認できる最少復元面積を算出したものである。

いずれの畑面からも栽培作物は検出されず、作物の痕跡と思われる窪みも畝上・畝間内とも確認することはできなかった。



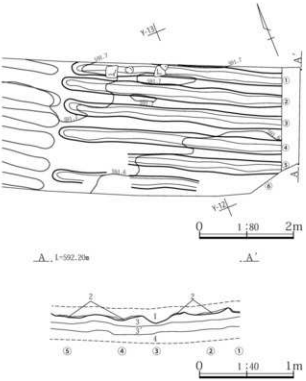
第６図　尾坂遺跡全体図

１号畑（第７図　ＰＬ．３-２・３・４）

調査範囲の東隅にあり、畝の長さの全容は把握できていない。西側に隣接する２号畑との境は両畑の畝間が互い違い状になり、両畑間には５㎝前後であるが隙間もあって本遺跡の中では最も明瞭であった。

畑の規模は調査区内での長さが 4.8 m、調査区内での幅が 2.65 m、高さ２～６㎝で本遺跡内では凹凸がはっきりしている畝・畝間である。中心部分の走行はＮ－26°Ｅである。６本の畝間を確認した。ほとんどの地点で畝間隔 43 ～ 47㎝を測るが、①の西隅がやや南側に曲がるため 35㎝前後と狭くなっている。また、③と④の間のみ 55㎝前後と広くなっている。畝間を中心に層厚１～４㎝の As-A 一次堆積物がみられ、畝上部分にも②や④の北側でわずかに堆積している部分が見られる。その直上に畑を覆う泥流層が堆積していることから、軽石降下後、復旧や収穫作業前に泥流に覆われたと考えられる。なお、図示した断面図中央の畝間③に軽石が見られないのは、泥流に伴う礫が畝間を削ったために軽石が残存しないことによる。

なお、畝の形状が均等になっていないことから As-A 軽石降下直前には培土など作業が行われていないと考えられる。

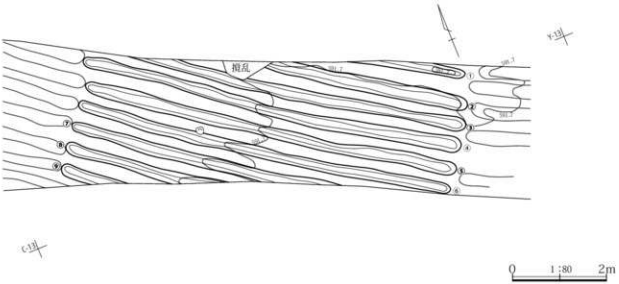


１号畑
1　天明泥流層。
2　As-A の純層。
3　黒褐色土　基本土層の Ⅲ層に相当する畑耕作土。3′には斑鉄多い。
4　暗褐色土　基本土層の Ⅳ層。

第７図　１号畑平面及び断面

２号畑（第８図　ＰＬ．３-３・５）

畝の全長を把握できる畑である。３号畑との境では畝間はすべて重複していた。畝間先端が細くなっていることと傾きが異なることで境を確認したが、畝間の互い違



第８図　２号畑平面

いも少なく全ての畑中､最も分かりにくいものであった。

規模は長さが8.25 m、調査区内での幅が4.2 m、高さは３㎝前後の部分が多い。中心部分の走行はＮ－36°Ｅである。１号畑より10°異なっている。調査部分から算出した畑面積は30.3㎡以上となる。他の畑の傾斜は20～25/1000であったが、当畑のみ11/1000で傾斜が弱い部分に位置している。

９本の畝間を確認した。全長が把握できる畑のなかでは際だって短い。畝幅は42～46㎝だが、①と②の間が62㎝、④と⑤の間が53㎝で広くなっている。畝間に厚さ３～４㎝のAs-A純層が堆積している。テフラ直上に畑を覆う泥流層が堆積し、軽石降下後の作業痕跡が見えない状況は１号畑と同様である。

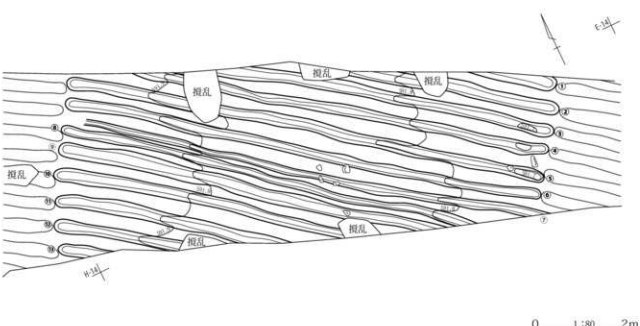
３号畑　（第９図　ＰＬ．３-６、ＰＬ．４-１）

畝の全長を把握できる畑である。西隅で撹乱の影響で一部不明瞭な部分がある。４号畑との境は重複していて隙間がないが、畝間が互い違いになっていて比較的分かりやすかった。

規模は長さが10.35 m、調査区内での幅が5.9 m、高さは２～４㎝を測る。中心部分の走行はＮ－37°Ｅで隣接する２・４号畑とはほぼ同一である。畑面積は56.7㎡以上となる。

13本の畝間を確認した。中央付近に変則的に狭い畝間⑦がある。３号畑の各畝間は４号畑の畝間とそれぞれ重複しているが、この畝間は４号畑に対応する畝間がない。また⑧との間隔が著しく狭く、畝部分がほとんど残らない部分もある。この畝間を境に南側の畝間は東隅で屈曲が大きくなっている。⑥と⑧の間が広くなったため、隙間を埋めるように⑦を東側から追加したようにも見える。

畝間は⑦⑧を除くとやや広めで47～54㎝の部分が多く、①と②の間は60㎝あった。畝もあまり高さがなく、As-A降下後に作業が加わった可能性があるが、明瞭ではなかった。次頁以降の４号畑に、この作業の内容を託した。



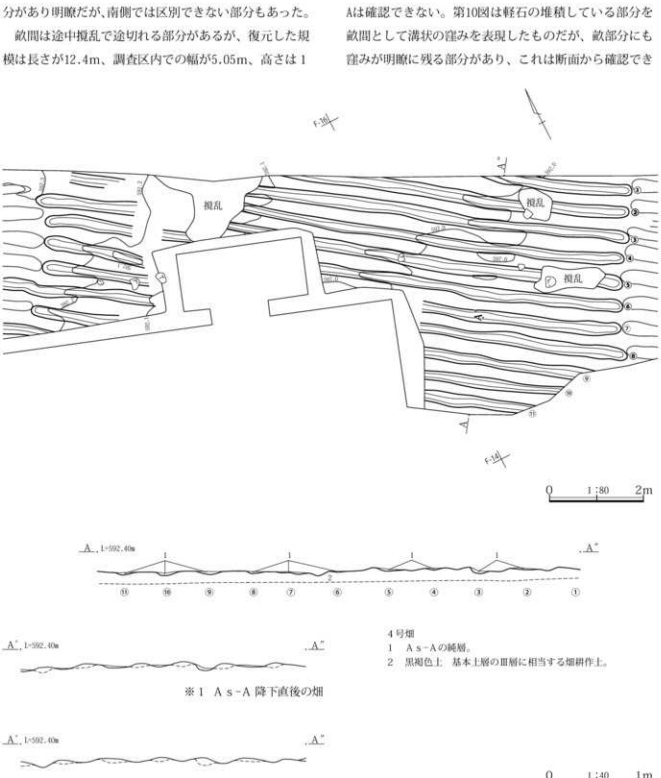
第９図　３号畑平面

４号畑（第10図　ＰＬ．３-６、ＰＬ．４-２・３・５）

畝の全長を把握できる畑である。西側で攪乱の影響が多く、残存状態は悪かった。５号畑との境はほとんどの畝間が重複していたが、北側で畝間が互い違いになる部分があり明瞭だが､南側では区別できない部分もあった。

畝間は途中攪乱で途切れる部分があるが、復元した規模は長さが12.4m、調査区内での幅が5.05m、高さは１～４㎝で２㎝前後の部分が多い。中心部分の走行はＮ－35°Ｅである。畑面積は63.2㎡以上となる。調査した畑の中で畝間は最も長い。11本の畝間を確認した。

４号畑は畝部分が不明瞭で高さに乏しく、上面にAs-Aは確認できない。第10図は軽石の堆積している部分を畝間として溝状の窪みを表現したものだが、畝部分にも窪みが明瞭に残る部分があり、これは断面から確認でき



４号畑
１　Ａｓ-Ａの純層。
２　黒褐色土　基本土層の Ⅲ層に相当する畑耕作土。

第10図　４号畑平面及び断面

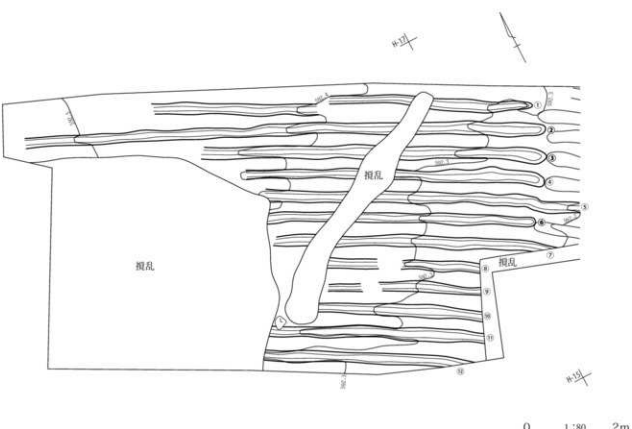
る。畝間ではAs-Aがやや厚く堆積しているが、畝はこの部分のAs-A上面と同レベルであるか、畝間と同規模の窪みとなって確認されている部分もある。畝を崩して軽石を畝間ごと埋める降灰からの復旧作業が想定されるのだが、新しい畝部に高まりは確認できない。作りたての畝のため土が柔らかく、泥流で押し流された可能性があるが、一方畝を崩しながら畝間を埋めるようにして作物の収穫作業が行われ、畝立ては行われていなかった可能性もあろう。第10図下側の断面図には、※１に軽石降下直後の畑(薄線部分に畝があったと想定される)と、※２に泥流に埋もれる直前の復旧後または作物収穫後の畑(薄線部分に旧畝土が乗せられていた可能性がある)想定断面図を記した。

畝幅は46～50cmで⑦と⑧の間のみ42cm前後でやや狭くなっていた。畝間は畝北側に接する部分で直線的に鋭く掘り込まれ、畝南側に接する部分で緩やかな掘り込みとなる傾向がある。層厚３～４cmのAs-A軽石が堆積していた。

５号畑　(第11図　ＰＬ．４～７)

調査範囲の西隅にあり、畝の長さの全容は把握できていない。特に西隅の残存状態が悪かった。

規模は調査区内での長さが11.1ｍで全長のわかる１・２号畑より長かった。調査区内での幅が5.7ｍ、高さ１～４cmで本遺跡の中でも凹凸の明瞭でない畝・畝間であった。中心部分の走行がN－26°Eである。１号畑とともに東西方向から離れた走行であった。12本の畝間を確認した。畝幅約46～52cmと他の畑よりわずかに広い程度だが、畝間幅が24cm前後と狭い部分が多いため、畝が広く見える。４号畑と同様に畝は低く、畝間よりレベルの低い部分も見られるが、As-Aは畝間内にのみ見られる。畝部分に窪みはないのだが、４号畑同様にAs-A降下後に復旧または作物収穫作業が行われたと思われるが、残存状態が悪く４号畑ほど明瞭ではない。

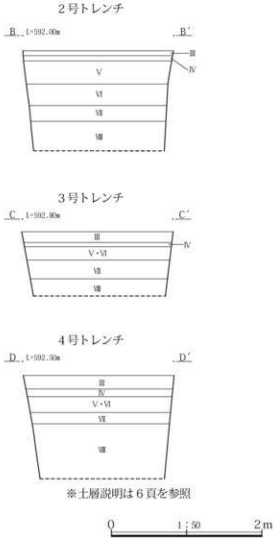


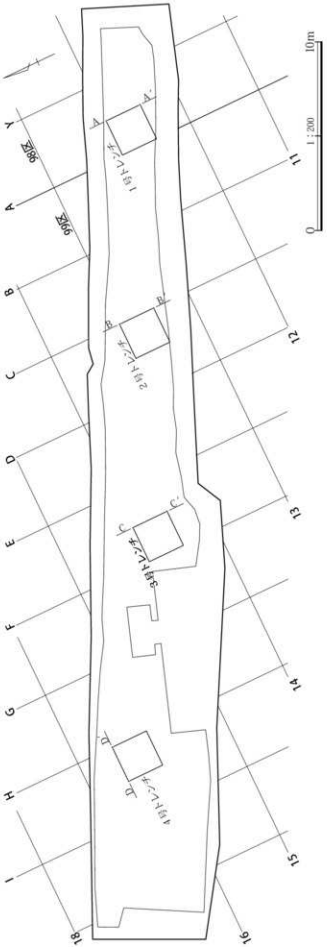
第11図　５号畑平面

第２節　天明泥流下畑以前の調査

畑面の調査後、調査区の中に２m×２mのトレンチを４か所設定して下面遺構確認調査を行った。トレンチは各畑面を網羅するよう、10 m間隔に設定し、ハッ場ダム関連調査の尾坂遺跡で縄文時代遺構が確認されるローム状土下まで掘り下げたが遺構は検出されなかった。

トレンチ中層以下から出土した遺物は、縄文時代のものと思われる黒曜石微細剥片が１点検出されたのみであった。調査地点が中位段丘の西隅の狭い平坦地にあって集落域から外れ、遺構の稀な地点であることは想定されていたが、北側の上位段丘上に縄文時代の大集落である長野原一本松遺跡が隣接していることを考えると、縄文時代遺物のきわめて少ない地点であるといえよう。





第 12 図　トレンチ調査配置図と土層断面

第３節　古代以降の出土遺物

本遺跡の泥流下からの出土遺物はごくわずかで、PL．５の下に掲載した16点で全てである。いずれも小破片で図示には耐えられなかった。

第２表に観察を記した。内訳は江戸時代の陶磁器13片、金属製品（煙管）破片１片、時期不詳の土器と土師器２片である。磁器の比率がやや高く、18世紀の消費地の様相を示している。

畑表面から出土した遺物にも強い磨滅の痕跡はなく、泥流によって運ばれた遺物ではないようだ。

これらの遺物は近接した人家から流れ込んだものではなく、陶磁器は堆肥と共に畑内へ運ばれた町ゴミと考えたい。煙管も歪みのある破片で、畑の作業者がこの地で遺失したものではなさそうである。

このほか縄文時代の遺物と思われる黒曜石の微細な剥片が１点出土しているが縄文土器の出土はなく、付近は近世にいたるまで居住域からは離れた地点であったと想定できる。

第２表　畑出土遺物一覧

	種　別	器種	残存部位	出土位置	特　徴　な　ど	時　期
1	製作地不詳陶器	不詳	口縁部片	畑表面	内外面に灰釉。	時期不詳
2	瀬戸・美濃陶器か	碗か	口縁部片	畑耕土内	内外面に柿釉。	江戸時代か
3	肥前磁器	碗	口縁部片	畑耕土内	内外面に氷裂文状の染付。器壁は薄い。半球碗か。	江戸時代
4	肥前磁器か	不詳	体部片	畑耕土内	残存部無文。	江戸時代
5	肥前磁器	不詳	体部片	畑表面	残存部無文。	江戸時代
6	肥前陶器	碗か	体部片	畑耕土内	陶胎染付。	江戸時代
7	肥前磁器	碗か	高台片	畑表面	高台外面に２重圏線。	江戸時代
8	肥前磁器	碗か	高台片	畑耕土内	高台外面に１重圏線。	江戸時代
9	肥前磁器	不詳	体部片	畑表面	残存部外面無文、内面に染付。波佐見諸窯。	江戸時代
10	肥前磁器	不詳	体部片	畑耕土内	外面僅かに染付残る。波佐見諸窯。	江戸時代
11	肥前陶器	碗か	体部片	畑耕土内	陶胎染付。	江戸時代
12	瀬戸・美濃陶器	不詳	体部下位片	畑耕土内	内外面に灰釉。粗く不規則な貫入が入る。	江戸時代
13	肥前磁器	瓶類	体部片	畑表面	内面無釉。波佐見諸窯。	江戸時代
14	土器	不詳	体部片	畑耕土内	古墳時代以降の土師器片であろう。細片のため不明。	古墳～古代
15	土器	不詳	口縁部片	畑耕土内	口縁端部の幅が広く、中央はやや窪む。	時期不詳
16	銅製煙管	雁首	火皿	畑耕土内	全体に腐食が進むが、脂返しは湾曲し、火皿補強帯も小さいながら観察される。火皿外面には２条の横線が残存する。	As-A 降下以前の可能性高い

第４章　まとめ

尾坂遺跡はハッ場ダム建設に伴う発掘調査が開始された当初の 1994 年より、広大な面積の発掘調査が断続的に行われてきた。以下ではこれまでの調査地点を既調査地点、今回報告する調査地点を駅舎地点と仮称して説明を加える。

尾坂遺跡の既調査地点では、吾妻川に面した平坦地が中位段丘面で 180 m前後、下位段丘面でも 50 m以上の南北幅がある広大な敷地があり、ここにほぼ隙間なく畑が作られていた。駅舎地点周辺はこれに比べて狭隘な部分であるが、調査範囲全面に畑が見られた。可能な限り畑を広げる天明３年の景観がここでも確認できた。

尾坂遺跡駅舎地点で調査した畑は畝幅 45㎝前後の近似した形状の畑が５枚で、各畑間がきわめて接近し、足の踏み場となる隙間さえほとんど残らない状態であった。このような畑はハッ場ダム建設に伴う発掘調査では多数報告されている。第１表の周辺遺跡一覧の中に狭畝幅畑としたものがこれにあたり、長野原町域のみでなく、東吾妻町域にも広がっている。

これまでのハッ場ダム建設に伴う発掘調査で天明泥流下の多数の畑調査からは、畑の栽培作物が確認された例もある。特にアサが確認された畑が本遺跡畑と形状・規模が類似している。上郷岡原遺跡では畝間隔 35 ～ 40㎝の畑に収穫前の多量のアサが泥流でなぎ倒され、畑面を覆うような状態の畑が広く確認されている（16 区画畑など。文献８：Ｐ 42 ほか）。この他、尾坂遺跡既調査地点でも上郷岡原遺跡例ほど顕著ではないが、畑の上に倒れたアサが確認されている。

これらの畑で共通することは、畝間隔が狭いこと（35 ～ 45㎝前後）、単独で作られることはなく、何枚もの畑が畝・畝間の伸びる方向に重複すること、重複する畑と畑の境がきわめて狭くて通路がないことなどがあげられる。畑は畝・畝間方向と平行する側に細長いことが多く、この細長い畑の中央に円形平坦面と呼ぶ直径１m前後の隙間が規則的に並ぶ場合が多い。収穫前、高さ３mにも達するアサ畑において、畑のわずかな境は全く識別できないものである。同時に一定の高さまでアサが生育した後は、収穫が終わるまでアサの株間をぬって畑内で農作業を行うことも難しいと思われる。密集して育てることでアサが互いに支えあって倒れないようにし、下の葉を早く枯らして上方への成長を促進するような栽培方法であろう。

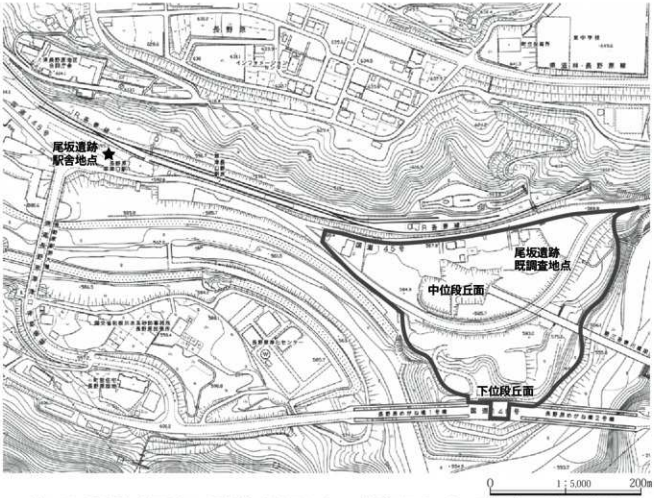
なお、天明３年の浅間山噴火に伴うテフラが長野原町を含む北側へ飛来するのは、新暦７月 17 日であることが知られている。他に７月 29 日以降と８月２日以降の２回も飛来したと考えられる。この内のどれであっても背の高いアサ畑で飛来した軽石を除去する復旧作業は不可能であろう。

尾坂遺跡駅舎地点の畑には作物が確認できず、アサ畑に必ず見られる円形平坦面も狭い調査範囲内では見つからないことから、栽培作物を特定することはできない。しかし、３～５号畑が収穫中もしくは収穫直後のアサ畑で畝上に根を引き抜いた窪みができ、１・２号畑が収穫前で畝上にも一部に軽石が見られるという堆積状態と矛盾しない。反面、水田のほとんどない長野原地域で、平坦部に広大なアサ畑を作れば、住民の食糧をどのように確保していたのか新たな疑問が生じる。

アサは江戸時代吾妻郡の名産品で、現在でも東吾妻町岩島地区で保存会による栽培が続けられている。ここでは７月末から８月初めにかけてアサの収穫が行われている。

前述の上郷岡原遺跡の例では収穫前のアサがなぎ倒された畑と、アサ収穫中の様子が同時に確認できており、天明泥流に被災した８月５日にはアサ収穫中であったことが分かっている。また、東宮遺跡ではアサの実が居住域の洗い場に置かれた桶の中から多量に出土し、アサの収穫作業直後の様相と推定できる。

調査で現れる広大なアサ畑は収穫時期が近づけば境界がわからなくなっている。種まきや初期の雑草とりなどは、畑ごとの作業が可能だが、少なくとも収穫作業は集落の共同作業であったと想定したい。



第13図　尾坂遺跡の範囲と今回の調査地点（長野原町 1/2,500 都市計画図「20」「21」平成23年12月測図を使用）

参考文献

1　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』2002
2　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』2003
3　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』2004
4　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『川原湯勝沼遺跡(2)』2005
5　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』2006
6　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下原遺跡Ⅱ』2007
7　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上郷岡原遺跡(1)』2007
8　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『楡木Ⅱ遺跡(2)』2008
9　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上郷岡原遺跡(2)』2008
10　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『細谷B遺跡』2009
11　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上郷岡原遺跡(3)』2009
12　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『東宮遺跡(1)』2011
13　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『東宮遺跡(2)』2012
14　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報19』2000
15　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報26』2007
16　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報27』2008
17　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報28』2009
18　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報29』2010
19　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報30』2011
20　群馬県吾妻郡嬬恋村教育委員会『鎌原遺跡発掘調査概報』1981
21　群馬県吾妻郡嬬恋村教育委員会『鎌原村発掘調査概報』2004
22　群馬県吾妻郡長野原町教育員会『町内遺跡Ⅴ』2005
23　群馬県吾妻郡長野原町教育員会『小林家屋敷跡』2005
24　群馬県吾妻郡長野原町教育員会『町内遺跡Ⅶ』2009

写 真 図 版

1　北側から眺めた遺跡周辺

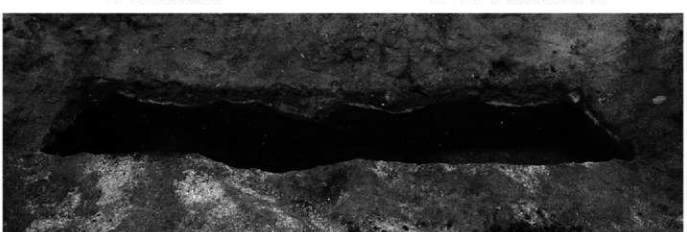
1　遺跡全景(東から)

2　遺跡全景(西から)

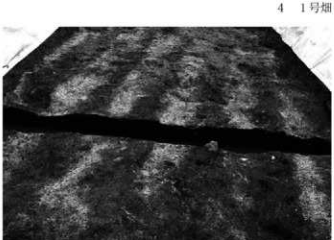
1　畑全景(南東から)

2　1号畑(北西から)

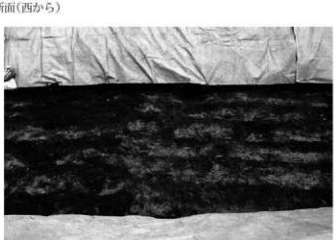
3　1号・2号畑境付近(西から)



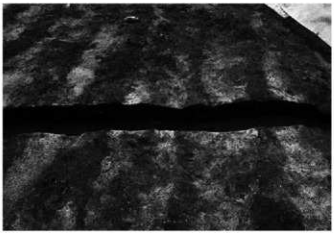
4　1号畑　断面(西から)



5　2号畑断面(東から)



6　3号畑・4号畑境(南から)



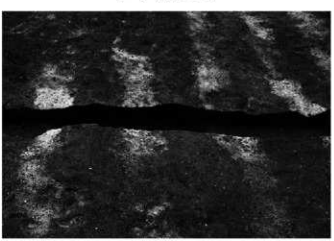
1　3号畑断面(東から)

2　4号畑(西から)

3　4号畑断面(東から)

4　5号畑(西から)

5　4号・5号畑(東から)



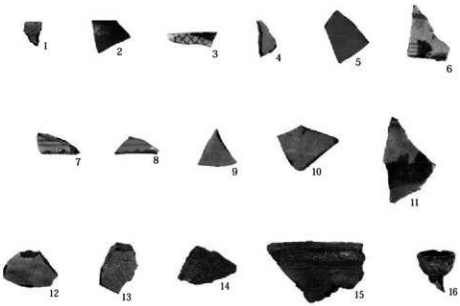
6　5号畑断面(東から)

7　軽石除去後の5号畑畝・畝間(東から)

1　下面の調査状況(西から)

2　2号トレンチ(西から)

3　4号トレンチ(西から)



4　出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	おさかいせき
書名	尾坂遺跡
副書名	社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	546
編著者名	新倉明彦・関根慎二・中沢悟・飯田陽一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120919
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	おさかいせき
遺跡名	尾坂遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちながのはらあざおさか
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町長野原字尾坂
市町村コード	10424
遺跡番号	201
北緯(日本測地系)	363237
東経(日本測地系)	1383905
北緯(世界測地系)	363248
東経(世界測地系)	1383853
調査期間	20111201－20111218
調査面積	440㎡
調査原因	八ツ場ダム建設工事に伴うJR駅舎整備
種別	生産
主な時代	江戸
遺跡概要	生産－江戸－畑
特記事項	天明三年(1783)浅間山噴火に伴う泥流で埋もれた畑地
要約	泥流に覆われた遺跡から江戸時代の畑を確認。付近は縄文時代から続く複合遺跡であるが、そのうちの江戸時代畑地の西限を確認。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第546集
尾坂遺跡
社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）
長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年（平成24年）９月12日印刷
2012年（平成24年）９月19日発行
発行／編集　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377－8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
電話　0279-52-2511（代表）
ホームページアドレス http://www.gunmaibun.org/
印刷／杉浦印刷株式会社